
ガラスでできたキミだから

Tsunaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスでできたキミだから

【Nコード】

N9382H

【作者名】

T s u n a k i

【あらすじ】

容姿端麗で成績優秀、誰からも好かれているように見える笹本幸。^{ゆき}しかし、幸の心には一番愛されるべき人がつけた、大きな傷が残っていた……

1, 「幸せ」は、誰より「不幸」だった。(前書き)

更新は不定期になってしまいうちも知れませんが、精一杯頑張ります
！
良かったら、評価・感想お願いしますm（

）
m

1, 「幸せ」は、誰より「不幸」だった。

でも、わたしはあなたのことが大好きだから・・・忘れないでね・・・

だったら、どうして死んだりしたのさ、姉さん…

唯一の家族だった姉が死んでから、もう6回ほど春が過ぎた。

時が流れると、皆のなかの姉さんは次第に朧気になり、時々、ああそんな人いたな、ほどの存在になってしまうのだ。

でも、そんな事は当たり前で、悲しいなんて思ったことはない。それより悲しかったのは、他人と同じようにいつの間にか朧気にしか姉のことを憶えていない自分。

どんなに優しく、どんなに綺麗な人だったか憶えているのに、声も顔もどこか違うような形でしか憶えていない自分。

ごめんなさい、姉さん。

あなたは、僕のせいだ…

「…というわけで今週の生徒会では…」

講堂に響き渡る声は淡々としていた。

生徒達はみな微動だにせず整然と並び、物音ひとつしない。役目を終えて壇上から降り、講堂の脇によると、生徒会副会長の富永が声をかけてきた。

「立派な挨拶でした、笹本会長。全生徒の模範ですね。」

にこやかな笑顔に黒縁メガネ。ピシッと制服をきて、真っ黒な髪は短く揃えてある。端正な顔立ちには嫌味ではなく、育ちの良さを思わせる雰囲気がある。

しかし、それを上回るのは、生徒会長の笹本 幸だ。薄茶の髪は規律を守った長さに切られ、スラリとした身体はよく目立つ。少し中性的だが綺麗な顔は憧れのまので、人望も厚く学校始まって以来異例の1年生の生徒会長に就任した。

彼をはじめとする生徒会が束ねるのは、超名門校、慶恩寺学園だ。

生徒達は皆大財閥の子息、令嬢達で、厳しい規律とハイレベルな授業が特徴である。

日本を担う立派な人材を育成しているこの学園は学年関係なく、人望が厚く教養のある人間を生徒会長に任命する。しかし、過去に1年生が就任したことはなく、幸の就任は本当に異例なことなのだ。

「そんな事はないですよ。僕もまだまだですから。」柔らかな幸の笑顔に富永は表情を和らげた。

幸の笑顔はいつも絶えることなく、生徒達の癒しとなっていた。

「以上で、朝礼をおわりにする。生徒達は各教室へ。」

先生の声で朝礼は終わり、一気に騒がしくなる。

各担任の声が響く。

「1組の生徒こっちへ！」

「こおら！熊谷！勝手に行動するな！」

「せんせー！木村が！！」

「きーむーらー!!」

賑やかだ。

幸は静かに微笑んだ。

幸らしからぬ、静かな笑み。

富永も気付いていない訳ではない。だが、富永は知っていた。富永は幸がずっと幼い頃からの知り合いで、幸の過去に何があった、それによって幸が心にあまりに深い傷をおってしまったことを知っていたのだ。

「富永先輩? どうしました? 考え込んで…」

いつの間にか講堂には誰もいなく、静まり返っていた。幸だけが、心配そうに覗き込んでいる。

「なんでもないよ。さあ、僕達も教室に帰ろう。」

幸はもう一度微笑んだ。

彼の姉にそっくりな、柔らかない笑み。

楓さん・・・

騒つく教室に幸が入るととたんに静まり返った。

「起立。」

幸が席につくと同時に担任の声。

授業が始まると幸はその視線を窓の外に移した。
頭に浮かぶのは、6年前の記憶。
唯一の姉が、この世を儚んで死んでしまったあの日。

タンタンタンタン・・・

台所からは味噌汁の匂いと包丁のリズミカルな音。
もぞもぞと布団が動くとその中から可愛らしい欠伸が聞こえた。

「・・・くああ」

くすつ、と台所から笑う声がする。

「幸。。。ゆ、き。」

優しい声。

優しい笑顔。

優しい姉が、大好きだった。

「ごめんね。幸？お姉ちゃん、疲れちゃった。幸のせいだよ？」
小さく囁く。

「でも、わたしはあなたのことが大好きだから・・・
忘れないでね・・・」

その時を思い出す度に苦笑する。
自分のせいで死んだのに、自分の事が大好きだと言った姉。

「矛盾：してるよ、姉さん。」

その時の心の傷は、今も幸のことを蝕んでいた。

放課後、幸はいつも寄り道をせずに家に帰る。

学校の最寄りの駅を使い、電車で30分ほどのところに幸の家はある。

両親が死んでからは姉と、姉が死んでからは1人で住んできた家。あまり、いい思い出はない。

毎日の、両親による虐待。幸を庇う姉の悲痛な声。

交通事故で他界した両親の遺影を前に、妖しく微笑んだ姉。

幸のせいで死んでしまった姉の、酷い死に様。

「うああああああ!!」辛い記憶が幸を蝕む。

幸の心から、人を信頼すると言う感情を奪いさってしまった。

誰も、信じない・・・。

誰も、信じない・・・。

誰も、信じない・・・。

おかしくなったように、幸は呟き続ける。

天使のような笑みを被った少年は、誰より悲痛な叫びをあげていた。「幸せ」の名を貰った少年は、今、誰よりも不幸だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9382h/>

ガラスでできたキミだから

2010年11月5日13時58分発行